

## 大阪・大坂城三の丸（京橋口）遺跡

- 1 所在地 大阪府大阪市東区京橋前之町
- 2 調査期間 一九八〇年（昭55）一月～四月
- 3 発掘機関 追手門学院校地学術調査委員会
- 4 調査担当者 藤井直正
- 5 遺跡の種類 近世城郭
- 6 遺跡の年代 安土桃山時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

大阪市のはば中央、上町台地の突端に所在する大坂城は、天正十一年（一五八三）豊臣秀吉の築城にはじまり、江戸時代には徳川幕府による支配の拠点となつたところで、壮大な石垣と二重の濠で囲まれた本丸跡・二の丸跡は特別史跡に指定されている。

大阪市のはば中央、上町台地の突端に所在する大坂城は、天正十一年（一五八三）豊臣秀吉の築城にはじまり、江戸時代には徳川幕府による支配の拠点となつたところで、壮大な石垣と二重の濠で囲まれた本丸跡・二の丸跡は特別史跡に指定されている。

豪の外側、すなわち東西南北の各周辺部には三の丸の区域がひろがつていて、明治以後市街地となつて現在に及んでいる。

今回調査を行なつたのは、大阪市東区京橋前之町に所在する追手門学院大手前高等学校・中学校の敷地で、校舎の改築に伴い、その建築面積九九〇平方mについて全面発掘を実施した。

本遺跡では、現在のところ六点の木簡を検出しているが、上記の遺構と対照すると、第二区土壤（SKO-）内二、同（SKO-）内二、下部包含層一である。

## 8 木簡の釈文・内容

器を包含する層を検出したほか、大小の石材が落とし込まれた状態で出土し、現在の地表までが整地層であることがわかつた。西半部の第二区も同様な状態であつたが、発掘区域の中央に南北一〇m・東西六m・高さ一mの石垣状の遺構（SXO-）を検出した。この石垣状遺構の周辺から第二区の西半にかけては、地表面下一・五mのところに厚さ七〇cmの屋瓦片を包含する黄褐色土層がひろがつてゐた。これを掘り下げて行つたところ、幅四～五m・南北六・八m・深さ二・二mの杓子状を呈する土壤（SKO-）を検出した。内部の土は暗灰色系の上層と黒色系の下層に大別することができ、上部には金箔瓦をふくむ屋瓦片が充満し、これに混じつて多種多様、しかも多量の木製品・陶磁器片が出土した。さらにこの西北部にも、南北二・五m・東西三・五m・深さ一m弱の楕円形の土壤（SKO-）を検出した。これらの土壤は、大坂落城時すなわち慶長・元和の役あるいはその前後における整地に際して、不用物を投棄するために掘られたものと考えられる。なお第二区では、かなり広範囲にわたつて地表面下五m前後のところにも遺物包含層（下部包含層）があつて、屋瓦片・木製品・陶磁器片等が出土している。

本遺跡では、現在のところ六点の木簡を検出しているが、上記の遺構と対照すると、第二区土壤（SKO-）内二、同（SKO-）内二、下部包含層一である。

地表面下約二mに青灰色粘土層がひろがり、この上面に屋瓦片・土

(1)   
・「□□与兵衛

小野右衛門尉

升力

·「一斗一升此內升」

171×29×7.5 033

『大坂城三ノ丸』  
一八〇〇年  
一九八一年（予定）  
一九八〇年  
大坂城三ノ丸跡（考古学ジヤーナル）

(164)  $\times$  18  $\times$  3 039

出土木簡六点のうち、墨書のあるのは右の四点である。积文は、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部による。(1)は下部包含層、(2)はSK○一、(3)(4)はSK○二から出土した。このほかSK○一から、墨痕の認められないもの二点が出ている。その一点は、一六一×二七・五×二三、○三三型式で、完形。もう一点は、九四×九×二三、○三一型式で、上端の先端近くと下端を欠き、一見人形のような感をうけるが、下端に切り込みの一部を残しているので、一応木簡とみてよいであろう。

木口に墨で黒丸を書いたもの一点がある。

9 関係文献

追手門学院校地  
學術調查委員會  
『大坂城京橋口遺跡—現地説明会資料』一九八〇年